

瑠

璃

窓

(5)

草 樂 生

大夫とチヨボ

文樂座の中堅株で將來を囑望されてゐた長尾大夫が、松竹社長の膽煎かどうかは知らねど、文樂を脱出してチヨボに走つた、そこで大夫連から抗議が出たので、長尾大夫は「長尾」の名を文樂へ返上、彼は新規の名で芝居の床に出るさうだ。

長尾大夫であらうが攝津大棟であらうが、大夫が芝居の床に出るのがどこに悪い？元來芝居は「身振芝居」と稱して淨瑠璃から出發したものが多く、故に大夫が芝居の床に出演するのは敢て不思議でない、不思議でないものを不思議らしく穿鑿して、彼是と姑の嫁

いちりをする狭量さを哀れむ。斯道發展のためならば、進んで芝居の床で出演し芝居を指導せねばならない。

チヨボに成り下つたといつて蔑視し藝人交際を絶つなどとは餘りにも狭量である、だが然し、チヨボにも一面の責任はあると思ふ。芝居が淨瑠璃を手本とし、役者は淨瑠璃語り即ち大夫の指導と教示によりて舞臺で動作したものである。故に昔の大夫は勢威並び無く芝居道に君臨し、幕内の式座でも大夫は上席に坐し役者からの挨拶を受けたものである、而已ならず役者の動作が淨瑠璃と調子の合はぬ間は何回でも稽古直しをしたものだ。

それが今日ではどうである？、チヨボは辛ふじて淨瑠璃語りとしての存在だけであつて、何等の權威もない役者の命令に従つて節や調子を變へさし役者の願使に汲々たるものである。尤も生計上の關係から權威も指導も棚の上にあげてゐるらしいが、餘りにも臍甲斐ない所業ではないか、之ではチヨボだつと蔑視されても致し方がない。私は古老から聞いたことだが、明治十年頃の事、松子太夫とか云ふチヨボがあつて役者が「あゝでもない此うでもない」と無理難題、松子も太夫として相當の見識を持ち役者からの勝手な註文を一蹴してゐたが、役者も座方も壓迫が激しくなつたのに憤慨し、淨瑠璃界面目の爲めに、と遂に道頓堀川に身を投じたといふ。

今のチヨボに松子太夫ほどの氣魄を有するものが何人あるだらうか、芝居のお添物的存在ではなく、役者を指導するだけの權威を持ちて上演し、淨瑠

瑠璃の名を穢さざるやう切に望む次第である。チヨボなる特殊階級的な輕語を拂拭し、文樂座であらうが、芝居であらうが、同じ流れの淨瑠璃として、斯道の奨励に努めねばならない。

淨瑠璃界の前途

人形淨瑠璃が進歩せるか衰退せるかは容易に斷定さるべきものでない、然し私をして言はしむるならば、今の淨瑠璃は昔に比して決して退歩してゐない、と斷言して憚らぬ。ところが常に素人淨瑠璃家の一部に、文樂は早晚滅亡するとか、衰退するとかの甚だ不謹慎な言辭を弄して淨瑠璃を誹謗してゐるのは實に心外であり沙汰の限りであり若し淨瑠璃が衰退するならばそれは誰の罪？大夫でも三味線でもなく、人形遣ひでもない、その罪は全く彼輩素人淨瑠璃家の責任である。

彼等は文樂を觀覽せざることに因つて寧ろ得々としてゐるのである、それ

が自分だけ觀覽せぬならばまだしも恕すべき點もあるが、他人の觀覽心を阻止するのである、彼等は常に「あんなつまらないもの」と極めて無責任な批評を下してゐる。文樂座は大阪の名物であり、大阪は淨瑠璃發祥の地であるから、郷土人は郷土藝術を擁護するの義務がある。それも淨瑠璃に全然無智識な、淨瑠璃に興味を持たぬ者ならば敢て關せず焉だが、苟しくも淨瑠璃を解し愛好するならば、郷土藝術を保護するの義務あり、保護するために萬全の策を講じ、局外者として職業者を指導し啓發に努むべきものである。

さは無くして、文樂を觀覽せざるを以て寧ろ名譽と心得、徒らに罵聲を放ち然も他人の觀覽心を阻止妨害せんとするは淨瑠璃界の毒虫である。そして自分は淨瑠璃界の大家を氣取つて職業者を誹謗するのみならず、二言目には故人の藝を比較し「攝津大様はうまかつた」とか、大隅や越路には全く魅殺されるとか、甚だしきは三百年も昔の

元祖義大夫や政大夫を對象にあげるのだから實もつて臍茶の至りである。

そこで私は淨瑠璃が昔と今を比較して、現在では決して衰退しておらない、寧ろ進歩してゐると云ふことに論を及ぼしたい。

成るほど元祖義大夫や政大夫は名人であつた、名人たらんとするために死に勝る難行苦行を重ね、艱難と努力の結晶が「名人」の榮冠を贏ち得たものである。その點には、今日の大夫や三味線や人形遣ひはお大名的修行であるかも知れない、しかしそこには生活環境なるものがあつて、元祿時代の修行と昭和の今日とは同一に論すべきものでない。たゞ私は現代の職業者「文樂座に出演せる人々」を推賞するのは、彼等は月に日に研究の歩を進めてゐる元祖義大夫や政大夫ほどの程度まで研究したのかは知る由もないが、尠くとも巨匠攝津大様や大隅や團平や越路などの所謂淨瑠璃黄金時代よりは、今日の職業者が遙かに研究慾に燃えてゐる

之を野球で評するならば、菅瀬や飛田は名人だ、加藤は名遊撃手だつたと無暗に昔の名手を絶賛してゐる、然し菅瀬が慶應に在り、飛田や加藤が早稲

田時代の研究心と、大東亞戦争前の中等學校の野球撰手とは、その研究心に於ては天地霄壤の差である、と同じ意味で今日の大夫や三味線や人形遣ひの研究心は遙かに攝津や大隅の研究慾を凌駕してゐる。そして何が故に研究心が進歩したか？、それは「時代文化」の一言に盡きる、五行本を棒讀同様に美聲のみを誇り律呂の巧者のみを目標の淨瑠璃では時代が許さない。その上に劇評家なる階級が存在してゐて新聞や雑誌で盛んに論評する、此の劇評家なる者は藝術家にとりてウルサイ存在であり、劇評家の批評なるものは必ずしも首肯に値するものではないが、それでも劇評家に啓蒙さるゝところが多い、故に研究せざらんと欲して研究せざるを得ないのである、茲に於て大夫

も三味線も人形遣ひも研究慾に燃えてゐる、研究する處必ず進歩がある、此の意味に於て今日の淨瑠璃は遙かに進歩してゐると論するのである。

二代政大夫は曰く「淨瑠璃は聲を語るべからず節を語るべからず、意を語るべし」と訓へた、實に千古の名言である、今日の大夫がその美聲に於ては攝津大様に一瞬を輸するかも知れないまた節廻しに於ては大隅に劣るかも知れない、然し淨瑠璃の「意」を語るためにには鏤骨の研究を重ねてゐることを斷言する。世の素人淨瑠璃家！、汝等は攝津の美聲や大隅の節廻を讚美する前に、今日の藝術家が汝々營々として「意」を語るべく研究せるその熱意を認識して批判せよ、そして純真と敬虔の態度を以て郷土藝術保護の任に當らねばならぬ、半可通な漫罵評は郷土藝術の精粹を蝕毒するものである。

一中節や富本が衰へたのは何が故なのか、繁大夫節が全然没落したのは何

が故か、彼等には研究心が無いために悲惨なる最後を遂げたのである、此の意味に於て淨瑠璃の將來は決して悲觀するものではない、看よ！最近の文樂觀覽層に智識階級の多いことを！、若し悲觀するならばそは素人淨瑠璃界の一部のみである。

素義の點取表

毎度苦言を呈するが、素義の大会に今なほ探點する弊風が跡を絶たない、野球や相撲ちやあるまいし、藝術の優劣を採點によつて決するなんて餘りにも藝術冒瀆である。それも平和時代の淨瑠璃を一種の「道樂」視する頃ならば敢て論ぜぬが、苟くも戦時下において藝能報國を提唱さるゝの際、神聖なる藝術を遊戲視し、玩具視し、尊敬すべき師匠を恰も幫間的待遇するなどは全く沙汰の限りである。斷然勝負表に等しき採點表を全廢し、明朗なる淨瑠璃界に還元すべく努力せよ。